

びわこの 考湖学

54

ひじょうんの大活躍もあった、国宝・彦根城築城400年祭は大成功を収めました。この彦根城と城下町が形成されたのは、慶長8(1603)年とされています。それ以前の彦根の景観を知る手がかりは少ないのですが、幸いにも「彦根古図」がそのあらましを伝えてくれます。今回は、彦根城の原型を起点にして、その歴史をお話ししましょう。

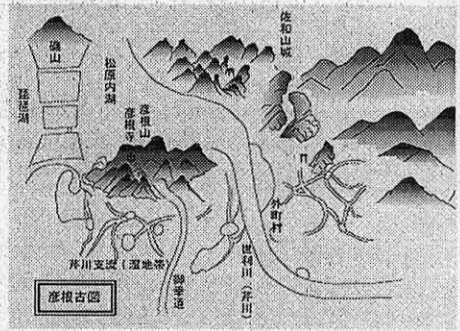
「彦根古図」に描かれているのは、戦国時代末期ごろの風景だといわれています。これを見ると、彦根城のある小山は、「彦根山」「彦根寺」として描かれています。その北には松原内湖が広がり、現在、彦根市街地の南側を流れる世利川(いまの芹川)が、かつては彦根山の東側で北に

大きく流れを変えていたこと、彦根山の周りには世利川の支流がいくつも流れ込み、沼沢地が多かったことが読み取れます。

その彦根寺は、平安時代から観音の霊場として知られており、天皇や上皇の参拝記録もありました。彦根城と城下町は、由緒ある霊場をほかに移し、山の土を削り、麓の沼沢地を大規模に埋め立てて構築されたのです。内湖と沼沢地の中に浮かぶ霊験あらたかな山と寺院。彦根城の原型は、このような宗教的な景観でした。なお、彦根寺に伴う考古学的な証拠は未発見ですが、今後の調査による新知見が期待されます。

この景観は、彦根藩と徳川幕府により、天下の名城へと変貌しましたが、成り行き次第では彦根山の東側で北に

彦根城3つの候補地



「彦根古図」の略図

第では、霊場として残っていたかもしれない。成り行きを決めたのは一つの「鉄砲玉」でした。

彦根藩初代藩主井伊直政は、関ヶ原の合戦後、石田三成の居城だった佐和山城にまぎ入城しますが、その治世を敷くに当たり、新たな築城計画を立てます。

その候補地は、佐和山城の西、琵琶湖に面した礪山(米原市)でした。しかし、直政は、関ヶ原の戦いで島津軍から受けた「鉄砲玉」の傷が癒えず、合戦の2年後に他界してしまっています。

跡を継いだ嫡子、直継は、候補地として新たに3つの案

を設け、慶長8年、幕府に伺いをたてました。第1案は佐和山、第2案は礪山、第3案が彦根山です。ここに初めて彦根山が候補にあがっています。直継はこの第3案を最も強く希望していたようで、その願いが幕府に届き、彦根山の築城が許されました。

興味深いのは、いずれの候補地も松原内湖に面していた点で共通しています。松原内湖は砂州に設けられた3つの水路によって、琵琶湖に通じていましたから、彼らは琵琶湖を介した「水運」にも執着

しながら新城の候補地を模索していたといわれてよいでしょう。織田信長も松原内湖で軍船を造っています。彦根藩の黎明期を支えた先人もまた、琵琶湖の持つ経済的、軍事的な重要性を強く認識していたのです。

彦根築城の工事は、彦根藩のみならず、幕府から手厚い援助と3人の奉行の派遣を受け、近江近隣の「七国一二大名」の支援も受けながら進められました。完成は元和8(1622)年、実に約20年の大工事でした。近世城郭の代表として後々まで親しまれた新たな景観がここに完成したわけですが、「島津の鉄砲玉」が初代藩主直政の命を奪ってなければ、彦根の景観は違ったものになっていたでしょう。

(滋賀県文化財保護協会 瀬口眞司)

「鉄砲玉」が成り行き左右?